子どもの健康と環境に関する全国調査（エコチル調査）

論文概要の和文様式

雑誌における論文タイトル：

Maternal exposure to smoking and infant's wheeze and asthma: Japan Environment and Children's Study

和文タイトル：

妊婦の喫煙と生まれた子どもの喘鳴および喘息発症との関連：子どもの健康と環境に関する全国調査(エコチル調査)

ユニットセンター（UC）等名： 富山ユニットセンター

サブユニットセンター（SUC）名：

発表雑誌名： Allergology International

年： 2021　　DOI： 10.1016/j.alit.2021.04.008

筆頭著者名： 和田拓也

所属 UC 名： 富山ユニットセンター

目的：

出産前後の母親の喫煙が、生まれた子どもの2歳までの喘鳴・喘息の発症リスクの増加と関連があることが示されているが、喫煙時期や受動喫煙の程度などばく露状況との関連を調べた研究は少ない。本研究は、妊婦の喫煙時期、受動喫煙の程度、生まれた子どもの受動喫煙と、子どもが 1 歳時点の喘鳴・喘息発症との関連を調べた。

方法：

質問票で妊婦自身の喫煙、妊婦及び生まれた子どもの受動喫煙と、子どもが 1 歳時点の喘鳴・喘息発症を確認し、多変量ロジスティック回帰解析を行った。妊婦自身の喫煙は、禁煙時期(妊娠前・妊娠初期)と 1 日の喫煙本数を、妊婦の受動喫煙は、1 週間のばく露頻度を、生まれた子どもの受動喫煙は、自宅で家族が喫煙した場所を、子どもの喘鳴は過去 12 か月間の喘鳴の有無を、子どもの喘息は医師が診断した喘息の有無を評価した。

結果：

エコチル調査に参加した 90,210 組の親子を対象に解析した。妊婦自身の喫煙は、生まれた子どもの喘鳴・喘息のリスク増加と関連があった。特に妊婦にアレルギー疾患の既往がある場合、生まれた子どもの喘鳴・喘息のリスク増加とさらに強い関連があった。また、妊婦の毎日の受動喫煙は、生まれた子どもの喘鳴・喘息のリスク増加と関連があった。さらに、生まれた子どもの受動喫煙は、子どもの喘鳴のリスク増加と関連があった。

考察（研究の限界を含める）：

妊婦自身の喫煙では、妊娠初期に禁煙した場合でも、生まれた子どもの喘鳴・喘息のリスク増加と関連があった。また、妊婦の受動喫煙では、頻度を問わず生まれた子どもの喘鳴のリスク増加と関連があり、毎日のばく露は生まれた子どもの喘息のリスク増加と関連があった。生まれた子どもの受動喫煙では、屋外であっても生まれた子どもの喘鳴のリスクの増加と関連があった。本研究は質問票を用いた調査のため、過小評価およびリコールバイアス（過去のことを思い出す際の正確性）による誤差の可能性があることや、生まれた子どもの 1 歳までの喘鳴は喘息以外の健康状態に関連している可能性があること等が研究の限界点である。

結論：

妊婦の喫煙は、自身の喫煙・受動喫煙ともに、生まれた子どもの喘鳴・喘息のリスク増加と関連があった。妊婦自身の喫煙は、妊婦にアレルギー疾患の既往がある場合、生まれた子どもの喘鳴・喘息のリスク増加とさらに強い関連があった。妊婦のみならず産後の母・生まれた子どもに関わる全ての人の禁煙の重要性が示された。